令和７年度
新時代に対応した高等学校改革推進事業
（普通科改革支援事業）
第３年次　研究開発実施報告書

１年生未来計画TGCの成果物「佐伯区を巡るカレンダー」表紙

令和８年３月発行

広島市立美鈴が丘高等学校

目次

０　はじめに……2

⑴　巻頭言……2

⑵　成果概念図……3

１　研究開発実施報告……4

⑴　「主体的に学習に取り組む力を測定する新尺度の開発と評価」……4

⑵　学校設定科目「未来計画」の充実……6

⑶　総合的な探究の時間「グローカル探究」の開発・探究支援システム構想……10

⑷　探究ブロックモンスターによる探究サイクルの質的改善……13

⑸　コーディネーターに関する取組……15

⑹　探究活動を重視した各教科・科目の授業改善……16

⑺　チーム担任制の運用……19

⑻　生徒が主体となって実施する学校行事「Enterprise Day」……23

⑼　校則改編の動き……24

２　連携機関等との意見交換・協議……26

⑴　コンソーシアム会議……26

⑵　運営指導委員会……35

０　はじめに

⑴　巻頭言

令和４年度に設定した、「校訓　『進取　友愛　節度』のもと、高い志を持ち、変化の激しい社会において自らの未来を切り拓き、『地域共生社会』の担い手となる人材を育成する」という学校教育目標に基づき、令和５年度より「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の指定校となり準備を重ねてまいりました。そして、この最終年次となる令和７年度においては、いよいよ新時代における「新しい普通科」として他校のモデルとなるべく、グローカル探究科（１学年２４０名定員）をスタートさせ、生徒にとっても教職員にとってもワクワク感のある学校づくりを進めています。グローカル探究科としての取組に挑戦することで、今年度大きな成果がありました。一人一人を適切に見取る「チーム担任制」という挑戦、課題解決や魅力発信等における地域や学外関係者との共創関係の構築、広島県立大学と連携した「主体的に学習に取り組む力」を定量的に測る新たな尺度と評価の開発。これらは既存の学校にはない新しい学びの場として大きな一歩を踏み出せたと自負しております。

そして、昨年度に引き続き、「自分で考え、判断し、主体的に行動する生徒の育成」を最上位概念とし、探究活動や教科学習だけにとどまることなく、学級経営・部活動運営等あらゆる教育活動において、「主体的に取り組む力」の育成を継続しております。ただ、課題として浮き彫りとなってきたのが、従来の教育において重きを置いていた「指導」から、安全安心なガードレールを敷設したうえで主体性を発揮できる環境づくりを土台に進めていく「支援」としての教育への転換。この意識がまだまだ浸透していない現状の社会において、いかに浸透を深めていくかは私自身にも突き付けられた大きな課題であり、昨年12月には、FC今治高等学校学園長でサッカー元日本代表監督の岡田武史氏にも本校へ足を運んでいただき、地域対象教育講演会を開催しました。今後求められる教育の方向性について、本校の取組と合わせ、引き続き社会へ発信していく必要を感じています。

自ら心のエンジンに火をつけ、学びを自走し、多様な他者と関わりながら、様々なプロジェクトへ積極的に参加することで、自らを育てていく生徒があふれる学校。指定校事業は今年度で終了しますが、そんな新しい景色をこの学校で実現していくことを目標に、今後も方向性を見誤ることなく、継続的に取り組んでまいります。

結びとなりますが、これまで御指導と御助言を頂戴しております、岡山大学教師開発センター教授　香山真一先生を始め、先進校視察で御協力いただいた高等学校の校長先生方や教職員・生徒の皆様に篤く御礼申し上げます。また、この事業の運営にあたり、広島市教育委員会学校教育部指導担当部長　星野和敏　様を始め、多くの関係者の皆様に御教授・御支援を賜りましたことに、心より感謝申し上げ、巻頭の御挨拶とさせていただきます。大変ありがとうございました。

令和８年３月

広島市立美鈴が丘高等学校
校 長　　合 田　　和 広

【広島市立美鈴が丘高等学校】グローカル探究科（令和7年度設置）

学校教育目標：校訓「進取 友愛 節度」のもと、高い志を持ち、変化の激しい社会において、自らの未来を切り拓き、「地域共生社会」の担い手となる人材を育成する。
育成を目指す資質・能力：地域や社会の課題を見出す力/正解のない課題に向き合い続ける力/協同して課題を解決する力

「都市部での探究を軸とした教育システム」の開発を推進。R8年度からグローカル探究（4単位）として本格実施。

令和7年度の目標

- 生徒の主体性を育成する「チーム担任制」の運営
- 「探究」の基礎力を育成する学校設定科目「未来計画」の後期プログラムをコンソーシアム連携型へと発展
- 令和8年度実施予定「グローカル探究」の計画及び支援システムの構築
- 主体的に学習に取り組む力を測定する新尺度の開発と試験導入

令和7年度の取組状況

- 80人の生徒に4人教員がつく（内担任3人）ポッド制を導入し、生徒への面談等をローテーションを組んで行った。各教員の得意分野を生かして生徒に伴走した。教員の年次有給休暇等の取得促進や生徒指導スキルの向上に寄与した。
- コンソーシアムと連携した「TGC（タンキュウグローカルコラボレーション）」で地域課題解決と地域魅力発信を行った。地域・行政・企業と探究プログラムを共同開発し、成果を地域社会へ還元するシステムの基礎を構築した。
- 4単位の探究学習を充実させる支援システム（プロボノメンター登録システム、チーム担任チューター制、専門コース制、探究教材inspire high）の導入により、生徒の自律的な学びを推進する。
- 県立広島大学の向居教授らと共同開発を進め、高校生の主体的に学習に取り組む態度・協働スキル・自己効力感などを測定することを目指した。ICTを活用し、自校の生徒に対し「主体的に学習に取り組む力 質問紙（高校生用・β版）」の回答を実施した。

令和7年度の〇成果と●課題

〇「探究を軸とした教育課程」を教員の負荷をできるだけ抑えながら、かつ生徒が自走しやすい仕組みで実現するための構想を固めることができた。
〇コンソーシアム連携型プログラム（TGC）の実施によって、地域・学校関係者と「探究における共創関係」の構築を実現し、地域魅力発信カレンダー贈呈など、地域社会へ成果を還元した。
〇高校生の「主体的に学習に取り組む力」を定量的に測定する尺度の開発と評価を実施した。

●組織的かつ、きめ細かな教育活動の広報を行う。
●「学びの自走」「ロールモデルとの出会い」等をキーワードとしたキャリアデザインの構築が急務である。
●チーム担任制に対応した学年職員室や探究学習を推進するための環境を充実させる。

1　研究開発実施報告

⑴　「主体的に学習に取り組む力を測定する新尺度の開発と評価」

＜令和７年度の振り返り＞

ア　目標

・　高校生の「主体的に学習に取り組む力」を定量的に測定する尺度の開発と評価を行う
・　教師評価、自己評価、AI解析を統合した新たな評価手法の有効性を検証する
・　現在１人当たり毎年約 3,000 円かかっている民間の非認知能力測定ツールに代わる、無料の独自ツールを実用化する。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）取組概要

・　県立広島大学の向居教授らと共同開発を進め、高校生の主体的に学習に取り組む態度・協働スキル・自己効力感などを測定することを目指した。
・　既存の SDLRS（自己主導型学習準備性尺度）や SRSSDL（自己主導型学習自己評価尺度）などの先行研究を参考に、新たな自己評価尺度の開発に着手した。
・　大学の研究者と協力して質問項目案（258 項目）を作成し、AIの支援も受けながら因子の分類や項目の重複チェックを行った。
・　タブレットと Google Classroom を用いて、自校の生徒に対し「主体的に学習に取り組む力質問紙（高校生用・β 版）」の回答を実施した。

（イ）成果

・　学習の自己調整や粘り強さ、情報探索・活用力など、測定すべき因子を具体的に想定し、多角的な視点から項目の原案を作成した。
・　β版の質問紙を作成し、学校内で生徒が約 30分で回答を完了できる実施体制（タブレット活用）を確立・実行した。
・　無料ツールの実用化に向けたβ版調査を実施できたことで、今後のツール切り替えに向けた具体的な進展が得られた。

（ウ）課題

・　258 項目という多数の候補から、実際の調査で生徒に提示するための項目数（想定される因子ごとに 10 項目程度）へと絞り込む作業に時間を要している。
・　「主体的に学習に取り組む力」の定義について、文部科学省の枠組みと心理学的知見とのすり合わせ等、概念の精緻化に引き続き議論が必要である。
・　尺度の一般化可能性の検証や、教師評価および自己評価における評価基準のばらつき（バイアス）への対応が求められる。

＜次年度への展望＞

・　収集した本調査データを基に、因子分析や信頼性分析、相関分析などの統計解析を実施し、尺度の構造検討と精緻化を進める。
・　実用の目途が立った段階で既存の民間の非認知能力測定ツールから本ツールへの切り替えを完了させ、総合的な探究の時間等を通じた学びの深化に資する指標として活用していく。
・　三者懇談等で活用できるように各個人へのフィードバックシートを作成するプログラムを大学に委託して開発する。

▽主体的に学習に取り組む力測定アンケート（高校生用）

主体的に学習に取り組む力 質問紙（高校生用）

・この質問紙は、あなたのふだんの学習のしかたや考え方についてたずねます。
・成績や評価とは関係がなく、答えに良い・悪いはありません。
・各文を最後までよく読んで、あなたに一番近いものを選んでください。

- 選択肢は5段階です。
- 1は「まったくあてはまらない」、2は「あまりあてはまらない」、3は「どちらともいえない**（半々）**」、4は「ある程度あてはまる」、5は「とてもあてはまる」を表します。
- **3＝「どちらともいえない（半々）」は、「できるときとできないときが半々のとき」だけ選んでください。なんとなく3は選ばないで、迷うときは「最近の自分に近い側（2か4）」を選びます。**
- 設問ごとに考え、同じ番号を続けて選ぶ必要はありません。

▽主体的に学習に取り組む力測定アンケート（教師用）

主体的に学習に取り組む力 質問紙（教師用）

・この評定票は、対象生徒の学習場面での行動がどの程度の頻度で見られるかをたずねます。
・直近1～2か月の授業・課題・探究活動での観察にもとづき、通常の様子に最も近い選択肢を選んでください。

- 選択肢は5段階（頻度）です。数値は目安です。
- 1は「ほとんど見られない（0～10%）」、2は「あまり見られない（10～40%）」、3は「ときどき見られる（およそ半分・40～60%）」、4は「よく見られる（60～90%）」、5は「いつも見られる（90～100%）」を表します。
- 「3＝ときどき見られる」は**およそ半分**のときだけ選んでください。迷うときは「より近い側（2か4）」を選びます。
- 設問ごとに判断し、同じ番号を続けて選ぶ必要はありません。

⑵　学校設定科目「未来計画」の充実

＜令和７年度の振り返り＞

学校設定科目「未来計画」では、①マイヒストリープロジェクト②好き探究プロジェクトを年度前半に実施するが、本報告では年度後半の③TGC：タンキュウグローカルコラボレーションについて焦点を絞って報告する。

ア　目標

本プロジェクトの最大の目標は、生徒が「自己の興味・関心」を「実社会の課題」へと接続させ、地域社会との協働を通じて「正解のない問い」に挑む態度の育成である。具体的には以下の3点を重点目標に据えた。

（ア）社会との接続による「問い」の高度化

１学年前半の自己探究で培った「好き」という主観的な興味を、地域社会や企業の具体的な課題と結びつけ、客観的な社会価値を持つ「問い」へと進化させる。

（イ）地域コンソーシアムとの協働による実践力の修得

年間３回のコンソーシアムの機会を利用し、行政、企業、専門家等の外部リソースと直接対話し、提案・実行・改善のサイクルを回すことで、主体的な行動力とコミュニケーション能力を養う。

（ウ）自己効力感の醸成と２年次個人探究への基盤作り

「自分のアイデアが社会に影響を与える」という成功体験を積ませることで、２学年の「グローカル探究（週４単位）」を自走するためのエンジンを形成する。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）取組概要

この TGC は生徒が 1 学年前半で取り組んだ「好き探究」や「マイヒストリー」の延長線上に、地域の具体的課題解決・価値創出型プロジェクトとして位置づけた。

- **選択の主体性**：興味関心に合わせて６つのプロジェクトから 1 つを選択する「公募型」の体制を導入。
- **本物の課題（Authentic Task）の提示**：連携先（佐伯区役所、広島ドラゴンフライズ、地元企業、近隣幼稚園）から、実際に大人が頭を悩ませている「未解決の課題」を提示。
- **他者との対話**：外部の専門家や実務家との対話を通じ、生徒のアイデアが実社会でどう機能するかを検証するプロセスを組み込んだ。

生徒は自身の志向に合わせ、次のいずれかのプロジェクトを選択し、社会実装を伴う探究活動に従事した。

① **“佐伯区いいね！”ポスタープロジェクト**：佐伯区役所・プロカメラマンと連携。観光資源の発掘と、五日市駅・区役所への掲示を目的としたポスター作成。

② **レスキューマインド向上プロジェクト**：美鈴が丘学区自主防災会連合会と連携。若年層の防災意識を高めるワークショップの企画・運営。

③ **保育力 UP プロジェクト**：近隣の山田幼稚園と連携。園児の発達段階に応じた知育製作物等の企画・贈呈および実演。保護者向け広報動画等の作成。

④ **地域活性化プロジェクト with サンボレ**：地元自動車販売会社と連携。企業の持つリソースを活用した地域貢献策の立案。

⑤ **生み出せトレンド！ドラフラタイアッププロジェクト**：プロバスケットボールチーム運営の広島ドラゴンフライズと連携。ホームゲームでの高校生の観戦促進案の企画および実施。

⑥ **グローカルイングリッシュキャンプ**：英語や異文化理解を通じた地域貢献。地元中学生を招待したイングリッシュキャンプの企画・運営。

（イ）成果

a　アウトプットの質の飛躍的向上（ポスタープロジェクト等）

プロジェクトの成果を地域社会に還元するように設定した。例えば、“佐伯区いいね！”　ポスタープロジェクトでは、探究成果を単なる「学校内での発表」に留めず、駅や区役所といった「公共の場」に掲示するという出口を設定したことが、生徒の意欲を刺激した。またプロカメラマン、行政担当者、美術科教員による「三者指導体制」を構築したことで、撮影技術、地域の魅力の訴求ポイント、ポスターデザインの全ての面において質が向上した。今後は地域の魅力を高校生目線で詰め込んだポスターカレンダーを学校内や地域関係機関各所に贈呈、掲示予定である。

b 「好き」と「ニーズ」の衝突による内発的動機への転換

当初、生徒は自分の「やりたいこと」のみを優先させる傾向にあった。しかし、例えば「保育力UPプロジェクト」では、園児の安全や発達段階という「現場の制約（リアリティ）」を突きつけられた。この「自分のやりたいこと」と「相手の必要としていること」の摩擦を乗り越える過程で、生徒の思考は「自己満足の探究」から「誰かを喜ばせるための探究」への質的な転換が見られた。

C　担当教員の“やらされ感”減少と、プロジェクト担当としての主体性の向上

これまでの探究の授業では教育研究部が指導案や指導方針を作成し、各探究担当に共有するという形をとっていたが、どうしても指導案通りに“こなす”という受け身の探究になりがちであった。しかし、TGCでは各プロジェクトに２人ずつ（若手教員＋経験豊富な教員）担当教員を配置し、ペアで協働しながらプロジェクトを運営したことで教育研究部が設定した一定の指導方針に沿って、積極的にプロジェクトを盛り上げていこうという姿勢が見られた。これは、学校の方針に沿ったプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営ごと教員に任せ、必要に応じて探究担当分掌等が支援に入るという、教員の探究に対する主体性を高める事例として、今後も開発及び効果検証を進めていきたい。

（ウ）課題

a　専門家投入のタイミングと企画の硬直化

プロジェクトを進める中で、生徒に全くのゼロベースで考えさせてもなかなかアイデアが出なかったり、深まらなかったりした。やはりプロジェクト初期にはプロジェクトに関連した知識を単元レベルで固めていき、その単元の中でプロジェクト関係者や専門家によるワークショップなどを取り入れていくのが効果的だと思われる。活動中盤以降に集中したプロジェクトでは、企画が固まった後の指摘となり、修正が困難になるケースが見られた。

生徒の試行錯誤を尊重しつつも、前提条件を整理するための「専門家による導入講義」の早期実施が必要である。

b　指導体制の定型化と教員負担の調整

プロジェクトごとに外部連携の密度や教員の介入度に差が生じた。また、外部パートナーとの調整業務が教育研究部の特定の教員に集中する傾向があり、持続可能な運営体制としてのマニュアル化が急務であるが、今年度は立ち上げ期ということもあり、探究を担当する教育研究部の主任が各プロジェクトの様子を観察し、必要に応じて各プロジェクトの担当者に連携先の提案や、接続の調整を行った。このように学校での外部連携には調整役が必須である。

＜次年度への展望＞

令和７年度TGCの成果と課題を踏まえ、次年度はさらに「プロジェクトの質」と「地域との協同性」を強化する。

ア　専門家連携の「早期化・定型化」による質の担保

プロジェクトの前半から専門家が伴走するスケジュールへと改編する。特にプロカメラマン（技術）、行政担当者（内容）、美術科教員（デザイン）による「三者指導体制」のような成功モデルを他プロジェクトにも展開し、生徒の自由な発想を損なうことなく、アウトプットの質を社会にも通じるレベルへと高めていく。

イ　教育コンソーシアムを生かした地域パートナーとの「共同開発」体制の構築

生徒が「提案者」で終わるのではなく、コンソーシアム連携を軸とした地域のパートナーと共に探究を創り上げる「共同開発者」としての立ち位置を強化する。この協力関係こそが、２学年の個人探究で必要となる「社会と対等に渡り合う力」の礎となるはずである。

ウ　結びに

本校のTGCは、地域社会を「学びの教室」に変える挑戦である。この挑戦を通じて、生徒たちが変化を恐れず自らの手で未来を拓いていくリーダーへと成長していくことを切に願っている。

▼TGC探究発表会風景

▼保育力UPプロジェクトフィールドワーク風景

▼ドラゴンフライズ試合観戦（企画調査）

▼グローカルイングリッシュキャンプ実施風景

⑶　総合的な探究の時間「グローカル探究」の開発・探究支援システム構想

＜令和７年度の振り返り＞

ア　目標

現代社会は、既存の正解を導き出す力だけでは対応できない複雑な課題に直面している。本校では、生徒が卒業後にどのような環境に置かれても「セルフダイレクション（何事も自分事として捉え、自分の頭で考え、自己決定して、責任ある行動を取る）」を育むことを教育の最優先事項に掲げている。本校の探究では、広い視野（Global）と足元の実践（Local）を融合させた「グローカル」の視点を大切にし、生徒自身の純粋な好奇心を社会課題と接続させ、単なる知識の蓄積を超えた、地域社会と地続きの「手触りのある探究」を実現することを目的とする。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）１学年の成果：地域社会への越境と自己効力感の獲得

探究の導入となる1学年では、学校という枠を越え、地域社会というリアルなフィールドに身を投じる教育プログラムを展開してきた。現場で働く大人たちから直接「地域の課題」を共有してもらい、若者ならではの視点で解決策を提案・実行するプロセスを通じ、生徒は「自分の行動が社会に変化をもたらす」という確かな手応えを得た。この１年間の歩みは、次年度から始まるより高度な探究を駆動させるための不可欠な原動力となっていくだろう。

（イ）２学年の計画：深化する「グローカル探究」と週４単位の挑戦

令和８年度より、２学年では探究に打ち込む時間をこれまでの４倍確保する。最大の特徴は、この授業に「週４単位」という、普通科高校としては極めて異例の時間を配分する点にある。これにより、表面的な調べ学習に終始することなく、生徒が自らの「マイテーマ」を徹底的に追究できる環境を保証する。

１年間のプロセスは以下のように展開する計画である。

a　**問いの設定と深化**（４月～６月）

EdTech 教材「Inspire High」を導入し、世界中の多様な生き方に触れることで自身の興味を深める。志望理由書の作成と連動させながら、探究における問いと自己のつながりを言語化させる。また、教科横断型授業をスポット導入し、生徒の思考を活性化させる。

b　**アクション（実践）フェーズ**（７月～11月）

アンケート調査や専門家へのインタビュー、実験、フィールドワーク、文献調査などを通じ、立てた問いに対する検証を繰り返す。この過程で、生徒が自ら探究に関する学習活動を企画・運営する機会を設け、さらに複数回の探究サイクルを回すことを通して、主体性のさらなる向上を図る。

c **修学旅行を「探究の現場」へ**

海外（バリ・ケアンズ）や国内（沖縄）の各地を発表やインタビュー、フィールドワークの舞台とし、広島で温めてきた探究を現地でさらに磨き上げる。海外修学旅行にはホームステイや現地校との交流の時間があり、生徒の探究発表を英語で行わせるなど、グローバルな視点を自身の探究にぶつけていく。この越境体験を、生徒の視座を世界へと押し広げる決定的な契機としたい。

（ウ）探究支援システムの構想：学びを加速させる重層的なサポート

a **チーム担任チューター制度の運用**

教員の属人性に依存した従来の指導から脱却し、普段から関わる教員の人数が多い、チーム担任（POD担当教員）が直接探究の伴走者となる仕組みを構築する。日常的な信頼関係を基盤に、生徒個々の性格や状況に応じた細やかな心理的サポートや進捗管理を可能にする。また、人事異動による指導の中断を防ぎ、３年間を通じた一貫性のある指導体制を確立することを狙いとする。

b **探究専門コース制度の運用**

地域魅力・職業専門・芸術・グローバルなど、生徒の進路や関心に基づいた６つの専門コースを設ける。コースごとの Google Classroom を活用して専門情報の提供などを行う。必要に応じて外部講師を活用しながら、週１回程度のコース別集会では近しい興味関心を持つ生徒同士が協同し、知的な刺激を与え合う。一方で、週３回の通常授業はHRと連動した探究クラスで実施し、前述のチーム担任が伴走するという、ハイブリッドシステムを構築していく。このように、チーム担任による「継続的な伴走」と、コース制による「専門的な知見」を有機的に掛け合わせる。これにより、生徒一人一人が安定した人間関係を基盤として、高度なマイテーマの追究に没頭できる教育環境を構築する。

c **プロボノメンター登録システム「Senpath（センパス）」の運用**

大学生や社会人のメンターがアドバイスやフィードバックを行う仕組みを構築する。専門的な知見を持つ大人との対話により、生徒の思考を磨き、探究の質を飛躍的に高めることを狙いとする。

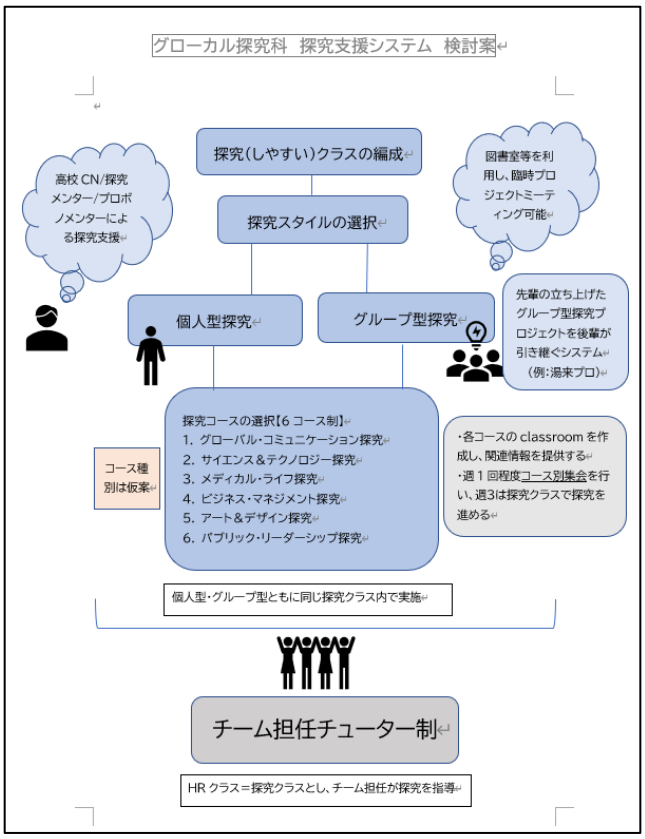
d **進路実現との有機的接続**

活動の節目で計４回の「志望理由書」作成を行う。自身の探究プロセスを論理的に整理し、それが進路先の学びといかに繋がるのかを言語化する。この積み重ねにより、大学入試等において役立つ説得力を備えた自己表現力を養う。

＜次年度への展望＞

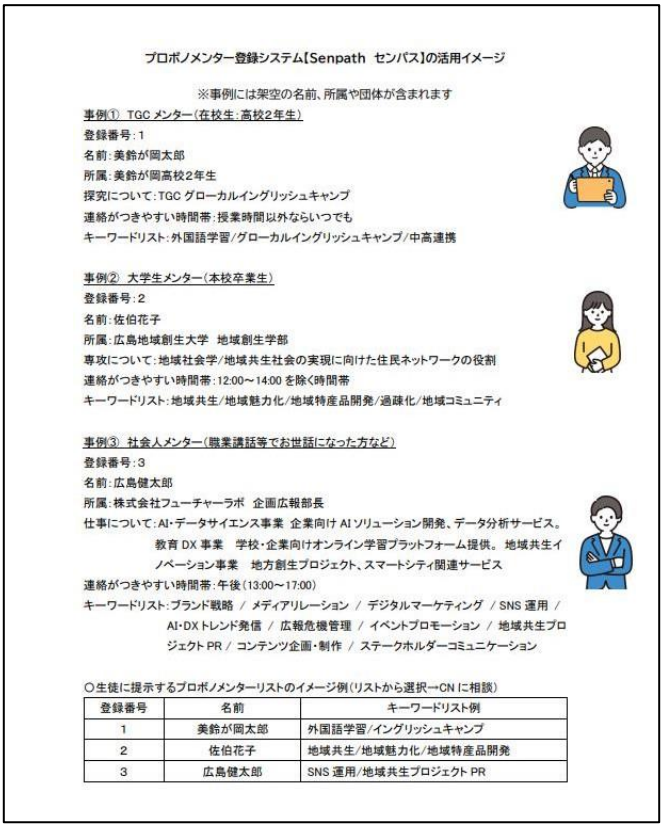
これまでの活動を通じ、生徒たちは「正解がないからこそ、自分で決める面白さがある」という事実に気づき始めている。今後は、この熱量を２学年での個人探究へと引き継ぎ、学校内に閉じない社会的な価値を持つ学びへと昇華させる。地域社会と学校が共に育つ持続可能な教育エコシステムの構築を推進し、生徒一人一人が「自分の人生の主人公」として未来を切り拓く力を磨き続けてほしい。

▼チーム担任チューター・専門コース制度



▼Senpath　（センパス）募集ポスター

▼Senpath　（センパス）活用イメージ



プロボノメンター登録システム【Senpath　センパス】の活用イメージ

※事例には架空の名前、所属や団体が含まれます

事例①　TGC メンター（在校生：高校2年生）
登録番号：1
名前：美鈴が岡太郎
所属：美鈴が岡高校2年生
探究について：TGC グローカルイングリッシュキャンプ
連絡がつきやすい時間帯：授業時間以外ならいつでも
キーワードリスト：外国語学習/グローカルイングリッシュキャンプ/中高連携

事例②　大学生メンター（本校卒業生）
登録番号：2
名前：佐伯花子
所属：広島地域創生大学　地域創生学部
専攻について：地域社会学/地域共生社会の実現に向けた住民ネットワークの役割
連絡がつきやすい時間帯：12:00～14:00 を除く時間帯
キーワードリスト：地域共生/地域魅力化/地域特産品開発/過疎化/地域コミュニティ

事例③　社会人メンター（職業講話等でお世話になった方など）
登録番号：3
名前：広島健太郎
所属：株式会社フューチャーラボ　企画広報部長
仕事について：AI・データサイエンス事業　企業向け AI ソリューション開発、データ分析サービス。
教育 DX 事業　学校・企業向けオンライン学習プラットフォーム提供。地域共生イノベーション事業　地方創生プロジェクト、スマートシティ関連サービス
連絡がつきやすい時間帯：午後（13:00～17:00）
キーワードリスト：ブランド戦略 / メディアリレーション / デジタルマーケティング / SNS 運用 / AI・DX トレンド発信 / 広報危機管理 / イベントプロモーション / 地域共生プロジェクト PR / コンテンツ企画・制作 / ステークホルダーコミュニケーション

○生徒に提示するプロボノメンターリストのイメージ例（リストから選択→CN に相談）

登録番号	名前	キーワードリスト例
1	美鈴が岡太郎	外国語学習/イングリッシュキャンプ
2	佐伯花子	地域共生/地域魅力化/地域特産品開発
3	広島健太郎	SNS 運用/地域共生プロジェクト PR

▼教科横断型授業（コラボ授業）イメージ

⑷　探究ブロックモンスターによる探究サイクルの質的改善

＜令和７年度の振り返り＞

ア　目標

「総合的な探究の時間」において、生徒が陥りやすい停滞の要因を可視化し、自己調整学習を促すためのツールとして「探究ブロックモンスター」を導入した。探究活動は「難しい」と捉えられがちだが、「探究ワールドにはモンスターが潜んでいる」というメタファー（比喩）を用いることで、生徒が自身の課題を客観的に捉え、探究を「楽しい」学びへと転換させることを目的とする。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）取組概要

本実践では、探究の初期から中盤にかけて現れる主要な課題を以下４体のモンスターとして定義した。

探究ブロックモンスター©2025 UchikadoYuki All Rights Reserved.

a　情報リテラシーの欠如：#1　シラベタダケ

ネットの情報を鵜呑みにし、悪気なく偽情報を拡散してしまう状態を指す。

【教育的効果】情報の信憑性を批判的に吟味し、複数の情報源を比較する「情報活用能力」の重要性を認識させる。

b　先行知見の軽視：#2　センコウジレイ

先人が調べた先行事例を見ない高校生に対し、その「呪い」が具現化した状態とされる。

【教育的効果】既存のデータや研究を尊重し、それらを土台として新しい問いを立てるアカデミック・インテグリティの姿勢を養う。

c　主体性・協働性の欠如：#3　マカセッパ

自分の役割を他人に丸投げし、自ら動かない状態を象徴する。

【教育的効果】チーム内での役割責任を自覚させ、主体的に学習に取り組む態度を育成する。

d　論理的仮説の不在：#４カセツナシ

自分の考え（仮説）を持たずになんとなく探究を進めてしまう「悲しき梨」の状態である。

【教育的効果】「問い」に対する自分なりの仮説を立て、それを検証するという科学的な探究プロセスの基本を定着させる。

（イ）成果

a　メタ認知能力の向上

生徒は自身の探究が停滞した際、それを「能力の欠如」ではなく「モンスター（課題）の出現」と捉えるようになった。例えば、調査不足を感じた際に「自分は今『シラベタダケ 』になっている」と自覚することで、速やかに次のアクション（図書館での調査等）へ移行する様子が見られた。

b 共通言語による対話的学び

「マカセッパ」や「カセツナシ」といった共通の言語を持つことで、教員から生徒、あるいは生徒同士でのアドバイスが容易になった。否定的な評価を避けつつ、「今の状況はどのモンスターに近いか？」という問いかけを通じて、建設的な振り返り（リフレクション）が可能となった。

c　探究プロセスの「自己調整」

モンスターという形式で課題が体系化されているため、生徒は「次にどのような困難が予想されるか」を予見し、未然に防ぐ手立てを講じることができるようになった。これは、新学習指導要領が目指す「自立した学習者」の育成に寄与する。

（ウ）課題

a　「発見」から「攻略（課題克服）」への接続

現在のモンスターは、生徒が陥っている停滞状況（例：仮説がない「カセツナシ」）を可視化することには成功しているが、それをどう「打破」するかという具体的な攻略法（学習の手順）が確立されていない。

b　探究ブロックモンスターの更なる作成と課題の可視化

探究における生徒のつまずきをつぶさに観察し、さらに探究ブロックモンスターを増やしていきたい。現在合計で11体を作成済みであるが、図鑑という形でより生徒が手に取りやすいように調整中である。

＜次年度への展望＞

探究ブロックモンスターが生徒の探究に与える影響の検証と、さらに生徒に対して探究のつまずきポイントを啓発していくために、探究ブロックモンスターの認知度拡大を目指していく。

⑸　コーディネーターに関する取組

＜令和７年度の振り返り＞

ア　目標

広島市立美鈴が丘高等学校の高校CNの取組により、本校の探究学習に関する企業・大学・地域等との連携・協働が効果的に進むよう研究に取り組む。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）取組概要

a　地域連携の強化

広島市内の企業（マツダ財団等）や大学（広島市立大学とのPSI連携等）との連携を強化し生徒が主体的に課題を探究する機会を提供できるようにした。

b　探究発表会の実施

３年生生徒による探究発表会に向け、高校CNが教員と連携しながら指導・助言を行った。

c　新学科開始への参画

令和７年度開設の『グローカル探究科』において、教育課程の検討や資・能力の育成目標の達成に、高校CNも参画した。

（イ）成果

高校CNが連携して行ったフィールドワークを通じて、生徒の地域課題に取り組む姿勢を育むことが出来た。

３年生生徒による探究発表会では、それぞれの生徒が個性を発揮することができ、終了後、地域関係者からも一定の評価を得ることが出来た。

（ウ）課題

生徒の「探究テーマの深掘り」の着地点と、企業・団体等の専門家のマッチングにおいて、多くの改善の余地がある。３年生の探究発表会では、実体験を伴う探究発表には躍動感の様なものが感じられ、「探究」には、「フィールドワーク」が必須だと思われるが、最終的に選抜された生徒の発表のうち、実際にフィールドワーク調査等に行った成果を発表した生徒は約半数であった。

＜次年度への展望＞

引き続き、高校CNが中心となって探究学習に関する企業・大学・地域等との連携・協働に取り組み、本校教員との連携もさらに深めて生徒の指導を充実させていきたい。例えば、企業・団体からの申し出に対して即応できるように、積極的にAIを活用していきたい。

⑹　探究活動を重視した各教科・科目の授業改善

＜令和7年度の振り返り＞

ア　目標

生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を個人思考と協同学習で学ぶ授業へと改善するために、全教員で取り組む体制を構築する。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）　取組概要

生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を個人思考と協同学習で学ぶ授業へと改善するために、全教員で取り組む体制を構築するべく、一昨年度は「問いを持って授業に臨む」こと、昨年度は「生徒に学びのハンドルを預ける（教師のほどよい不親切と適切な支援）」をそれぞれ重点課題としてきた。

これらの重点課題を継続させつつ、さらに今年度は、「生徒が自分の思いを紡ぐ」ことを授業改善の重点課題とした。「生徒が自分の思いを紡ぐ」とは、「正解のない問い」や「正解が複数ある問い」を教員と生徒が共有し、他者との対話を重ねながら最終的には「（それでも）自分は〇〇と考える」といった自らの考えを述べることができる状態を指すこととした。

（イ）　成果

「正解のない問い」「正解が複数ある問い」に対して「生徒が自分の思いを紡ぐ」場面を設けるために今年度の実践では、以下のようなものが挙げられた。

教科（科目）	正解のない問い・正解が複数ある問い
国語（古典探究）	・　良い和歌とはどのような和歌か～百人一首から和歌を選び、あなたなりの歌集を作りなさい～
地理歴史科（歴史総合）	・「近代化は人々の社会や生活を豊かにした素晴らしいものだ」という言説にあなたはどのくらい賛成ですか。
地理歴史科（日本史探究）	・「パックス・徳川ーナ（徳川による平和）」の画期を2つ挙げるとしたら、あなたは何を挙げますか。 ・「歴史を考える際は、現代の常識や視点・立場ではなく、その当時の常識や視点・立場に立って考えるべきだ。だから、現代の感覚で過去（戦争を引き起こしたことや植民地支配をしたこと）を断罪してはいけない。」という言説にあなたはどの程度賛成か？
数学（数学Ⅰ・A）	・　場合の数または確率にまつわる新聞記事を一つ取り上げ、内容を要約せよ。また、その新聞記事にタイトルをつけよ。

教科（科目）	正解のない問い・正解が複数ある問い
理科（化学）	・ 特定の金属を取り上げ、その金属が実生活の中でどのように使われているのか、その金属の性質を踏まえて述べなさい。 ・ 銀イオン、アルミニウムイオン、銅イオン、鉄イオン、亜鉛イオンのうち3つが溶けている。溶けているものを判定するための実験計画を立て、実践せよ。
外国語（英語）	・ あなたが教科書で学んだ内容を英語でリテリングせよ。
保健体育	・ 私たちは、ものごとをあるがままにとらえるだけでなく、自分の解釈にもとづいて認識する場合も多くあります。その解釈には、「考え方のクセ」が出やすく、それが自分自身の気分や行動に影響を与え、ストレスの原因となることがあります。その対処として、以下の資料を基に、あなたなら自分の友人が次の各ケースで悩んでいるとき、どのようにものごとのとらえ方や考え方を転換するように助言をするか条件に沿って考えてください。（資料割愛）
芸術科（音楽）	・ 民謡や芸能を存続させる難しさについて述べよ。また、民謡や芸能を存続させることの意義について述べよ。
家庭科（家庭基礎）	・ 以下の図①～図⑥の物件で、あなたが一人暮らしをするなら、どの物件を選びますか。優先した条件を3つ以上あげてそれぞれ理由を述べよ。（図割愛）
情報	・ SNS利用時に注意しなければならないことを述べよ。 ・ アルゴリズムを日常生活で例えて表現しよう。

（ウ） 課題

課題として、以下のことが挙げられる。

a 評価の難しさ

「正解のない問い」や「正解が複数ある問い」を設定し、生徒が自分の考えを紡いだものを評価する際、①公平性のある評価を、②膨大な時間と労力をかけて行うという二つの困難さを指摘する声が教員から寄せられた。

b 内容の深まりの欠如

生徒の考えの深まりの欠如についても困り感を持っている教員が多かった。もちろんルーブリックを用いてあらかじめ生徒に評価基準を伝達すれども、学習した内容や知識をふまえ、期待する水準に到達することは少なく、どうすればよいか悩まざるを得なかったようである。

c　学校としての方針の不明瞭さ

重点ポイントの趣旨には大いに賛同するが、さりとて、実際に目の前にやってくる大学受験に対応した授業の比重が大きくなり、学校としてどのような方向性で進路指導・教科指導を行っていけばいいのか見えないという声があがった。

d　授業規律の確保

こうした授業改善の重点ポイントを実施する以前に、生徒の授業に臨む姿勢に苦労する教員が圧倒的に増加した。

なお、こうした困り感に対して、「教員の努力不足」や「授業者のスキル不足」、「魅力ある授業ができていない教員の問題」といったように、教員側に問題の原因があると断じる意見をしきりに耳にしたが、現場の多くの教員は授業をよりよくしようと日々努力していることは指摘しておく。

＜次年度への展望＞

「普通科改革支援事業」に採択され、3年間にわたり、探究的な学びと協同学習を柱とした授業改善を継続してきたが、道半ばの感は否めない。

しかしながら、次年度以降は、これまで培ってきた重点ポイントを継続しつつ、探究的な学びと協同学習を柱とした授業改善をより一層進めつつ、現場の教員の悩みを一つでも解消する手立てとして、机間指導やワークシートの提出等など多様な方法によって《学習者の学習状況を見取る》ことを重点ポイントにしたい。

学習者の学習状況を見取るためには、机間指導が必要で、机間指導を実施すれば授業規律の確保につながり、また対話のきっかけにもなる。ワークシートの提出で学習内容を深めるための支援や手立てを講じたり、生徒にフィードバックする機会を設けたりすれば、学習内容の深まりも確保でき、意欲の向上にも資するのではないかと考えている。

⑺　チーム担任制の運用

＜令和７年度の振り返り＞

ア　目標

従来の学級担任制では、学級運営が個々の教員の経験や手法に依存しやすく、クラス間での指導格差や担任の孤立化が課題となっていた。これらを解消し、「チーム学校」として生徒一人一人の資質・能力を最大限に引き出すことを目標とする。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）取組概要

ａ　週替わりローテーション担任制

特定の教員が固定担任を持たず、週単位で窓口（担任業務）を交代するシステムを採用。これにより、特定の教員への業務集中を回避するとともに、生徒・保護者に対して「学年全体で支える」というメッセージを明確にした。

（イ）成果

チーム担任制の導入により、生徒・教員双方に以下の正の相乗効果が見られた。

ａ　生徒・保護者側への効果

①　多様なロールモデルとの接触

異なる価値観や専門性を持つ複数の教員が関わることで、生徒は自身の性格や悩みに応じた「相談相手」を自ら選択できるようになった。これは、不登校傾向にある生徒や特定の大人に抵抗感を持つ生徒のセーフティネットとして機能した。

②　指導の客観性と説得力の向上

複数の教員が同一の指導項目を伝えることで、生徒は「学校としての重要事項」を客観的に捉え、納得感を持って受け入れる傾向が強まった。

ｂ 教員側への効果

①　指導スキルの平準化とOJTの促進

若手・中堅・ベテランが共同で対応にあたることで、経験の浅い教員は実戦的な生徒対応・保護者対応を間近で学び、ベテラン層も自身の指導法を相対化する機会を得た。

②　ウェルビーイングの向上

困難な事案に対してチームで対応することで、心理的な負担が軽減された。また、相互フォロー体制により、年次有給休暇の取得や急な欠勤への対応が円滑になり、教員の労働環境改善に大きく寄与した。

（ウ）課題

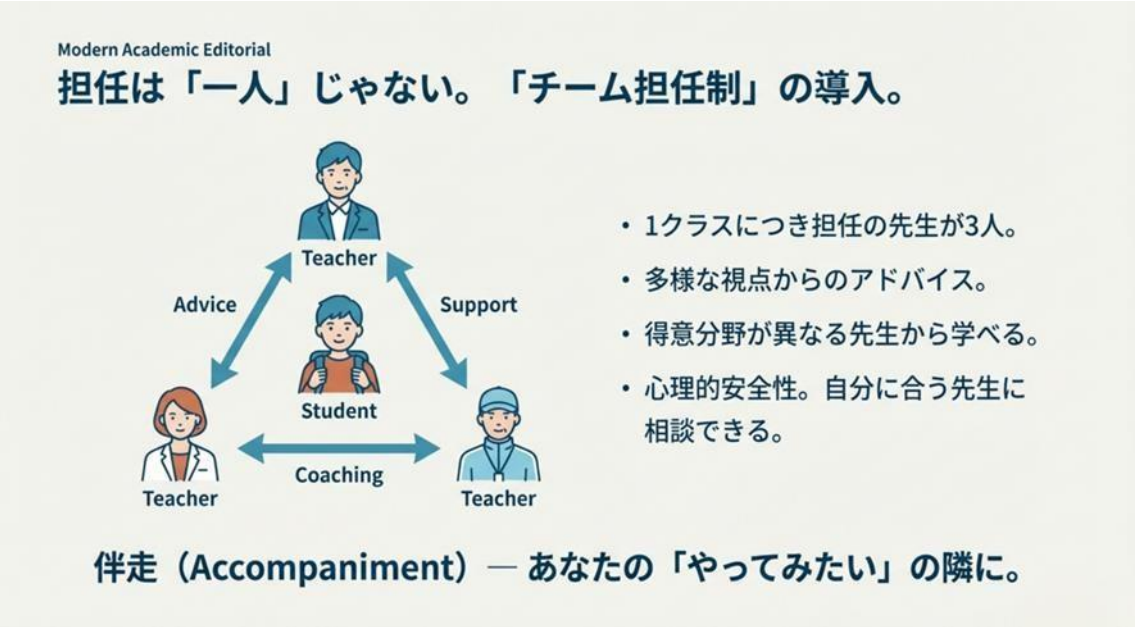
ａ　「生徒の主体性」と「教員の統率力」の両立

多様な教員が関わる分、指示の出し方やタイミングに齟齬が生じると、生徒が

混乱する恐れがある。生徒自らが考え動く「主体性」を尊重しつつ、学年としての統一したビジョンをどのように提示するか吟味する必要がある。

＜次年度への展望＞

本年度構築した「情報共有の仕組み」と「多角的視点による生徒理解」のノウハウを、次年度は「探究学習」の推進に活用する。探究学習においては、正解のない問いに対して生徒が試行錯誤するため、教員一人による指導よりもチームによる多様なアドバイスが不可欠である。学年全体を「学びのコミュニティ」と捉え、チーム担任制で培った連携力を生かして生徒一人一人の探究活動をより専門的、かつ伴走型で支援する体制を構築していく。



＜参考資料＞

「チーム担任制」の解像度を高めるために、各年代のチーム担任にインタビューを実施した。インタビュー対象は、教職経験１年目の新任教員と教職経験10年程度の中堅教員とした。

質問項目	業務量・心理的負担について 単独担任制（またはこれまで想像していた担任業務）と比較して、業務量や心理的な負担感に変化はありましたか？	生徒理解と対応について 複数の教員で生徒を見ることで、生徒理解や生徒指導にどのようなメリット・デメリットを感じましたか？	教員間の連携について チーム内での情報共有や意思決定はスムーズに行えていますか？改善が必要な点はありますか？	保護者対応について 保護者との連絡や面談において、チームで対応することの良さ、または難しさを感じたエピソードがあれば教えてください。
２０代新任教員	担任の業務は多岐にわたり、毎日多大な仕事量だと想像していたが、チーム担任であることによっ	自分では気づけなかった生徒の変化を他の教員が気づいていることが多くあり、複数の教員で見ることで、	チームの主任を中心にスムーズに行えていた。しかしそれは、主任が多くの時間を職員室で過ごし、３人の	良さとしては、どのように対応するかを事前に話し合うことができた点が挙げられる。特に、私は

	て、業務を分担できたり、方針について相談できたりして業務量的にも心理的にも負担は少なかったと感じた。業務量としては、週替わりであるため３分の２になるし、面談する人数も27人程度でよいため、想像していた担任とは大きく違い、初任で担任をするという不安は大分軽減されたと思う。	生徒を多角的に見ることができると思った。生徒からしてみれば、３人の教員の中から相談しやすい教員を選んで話すことができるため、メリットは大きいと感じた。特に女子生徒は、女性の先生に相談をしてくれることが多かったので、担任が異性しかいないという状況を避けられる点でもメリットがあると思う。また、生徒指導に関しては、厳しく指導する教員とそのフォローをする教員というように役割分担を行うことができ、指導が効果的にできた。デメリットとしては、担任のクラスが週変わりであるため、生徒の変化を細かく見ることができないことが挙げられる。	意見を公平に聞いてくださったからだと思う。もし、主任が他の業務と重なり、常に職員室にいることができず、情報共有を行うことができなかったら、ここまでスムーズにはいかなかったように思う。３人の担任のうち、１人の教員は教官室にいる時間が多く、情報共有が遅れることもあったが、主任がうまく回してくれていた。改善というよりも、この先もチームの主任が職員室に常駐することが円滑な情報共有を行うことに必要だと思う。	初任で保護者対応に不安が大きかったため、事前に話し合えたことは大変ありがたかった。難しさとしては、こちらから保護者に電話をかけて不在で、後から折り返しがあったときに、担任のうち、誰が何の用事でかけたかの共有ができておらず、保護者を混乱させてしまうことが多かったことが挙げられる。
３０代中堅教員	教員一人当たりが担当する生徒数は約３分の２になるので、負担感の軽減はできているように思う。ただ、本来担任であれば任されない分掌や委員会等の仕事が任されたりすることがある。チーム内での情報共有の大変さは負担になっていると思う。また、教員によっては生徒数を多く抱え込んでしまうことになり、チームの組み方によっては大きな負担になると考えられる。	一人の意見だけではなく、３～４人態勢で常に生徒対応に対するレスポンスを検討できるので、独りよがりな生徒指導にはなりにくいと感じるし、若手が萎縮せず生徒対応がしやすいところはメリットだと思う。ただ、授業担当に入ってない場合一つのクラスを担当するのが３週間に１週だけとなると、正直生徒理解は今年度に関してはかなり生徒差が大きく出ているように感じる。	比較的情報共有や意思決定は状況に応じたルール決めをしていればスムーズに行えているように思うが、情報共有のツールがかなり不足しているように思う。全体で生徒の情報を常に共有でき、使いやすいものが欲しいと強く感じる。現在の教育委員会の方針では、実名付きの状態で情報を共有するのが仮想デスクトップにアクセスするしかないので、データの確認や入力が正直億劫な場面が多い。	今年度は年間を通してクラス内の特定の生徒を面談で担当し、その生徒に問題があれば基本的にはその担当者が連絡する形にしていたからチームで対応することが原因の大きな事故はなかったように思う。ただし、小さな対応については担任が入れ替わり立ち代わりになるケースもあり、保護者も混乱したと思うが、我々教員側も今どうなっているかの情報共有がかなり難しいように感じた。

【経験年数別】立場ごとの深掘り質問 新規採用教員への質問（心理的安全性と育成の視点） 生徒対応や事務作業などで困った際、他のチームメンバーに相談しやすい環境（心理的安全性）はありましたか？中堅・ベテランの先生の対応を間近で見ることで、自身の学びや成長につながったと感じるエピソードがあれば教えてください。	【経験年数別】立場ごとの深掘り質問 中堅教員への質問（調整役としての負担とマネジメントの視点） 若手とベテランを繋ぐ「調整役」としての役割を担う場面はありましたか？その際、負担に感じたことや工夫したことは何ですか？チーム内で、ご自身の持ち味や得意分野をどのように発揮できたと感じますか？
心理的安全性は大いにあった。初任で担任ということに大きな不安を感じていたが、いつでもすぐそばに相談できる先輩教員がたくさんいて、一人で悩むことが少なかった。学年職員室があったことで、他の先生はどのように生徒の対応をされているのか、指導はどうされているのかを間近で見ることができて大変勉強になった。特に生徒指導に関しては、私は「叱る」ということが苦手で、生徒指導に関して不安を抱いていたが、先生それぞれの指導の仕方を見ることができて、自分のキャラクターを生かして生徒と対話することが大切なのだと思えた。また、学校の将来を考え、最善を尽くそうと奮闘している年上の先生方を見て、自分もこんな風に仕事ができるようになりたい、と目指す姿を持てたことが大変ありがたかった。何より、同じ悩みを抱えた教員同士が気軽に相談し合ったり、たわいもないことを話したりできる職員室という環境が楽しかった。この楽しさこそが心理的安全性を確保できた要因だと思う。	若手に大きく助けてもらったパターンのほうが大きかったように思う。ただ、校内での手続きや対応の方針など今までの経験からどういう風に対応すべきなのかをベテラン教員と話して方針を決定することに関しては役割を果たせたのではないかと思う。ただ、今年度の業務の最中に若手の教員が自分の仕事を巻き取ってくれている様子を多々感じており、そこは大きく助けられたと思う。

⑻ 生徒が主体となって実施する学校行事「Enterprise Day」
（実施予定が3月18日（水）のため、進捗状況のみ記載）

＜令和7年度の振り返り＞

ア 目標

「Enterprise Day」を実施していく上で、企画、準備、運営の活動を通じて生徒が主体的に物事を進める経験を積み、自分たちの行動で地域や社会を変えられるという姿勢を育む。

イ 目標達成に向けた取組

令和6年度の企画の段階から、週1回程度生徒会と未来会議による合同定例会を実施し、「Enterprise Day」の方向性や企画発案を行ってきた。その中で、生徒は積極的に意見交換を行う一方、「生徒が主体の行事と言われても、どこまでやってよいのか分からない」などの意見や、教員側からしてもどこまで道を示してよいのか分からない状態であった。そのような中でも、生徒は、どうすれば生徒全体が楽しめて活発に活動できるか考え、主体性の育成につながっていた。

また、今年度に入って「未来会議」の活動や運用がほとんどされておらず、生徒会がその役割を吸収している状況である。

＜今後の展望＞

進捗状況としては、生徒会が中心となり実施要項や当日の試合スケジュールなどを作成、現在は各種目「サッカー・フットサル・ドッチボール」の審判用ルールの作成や当日の動静の計画などを立てている。

⑼　校則改編の動き

＜令和７年度の振り返り＞

ア　目標

本校が学校生活の最上位目標に掲げているセルフダイレクション（自ら考え、主体的に判断・行動する力）とリスペクト（他者の違いを認め、安全・安心な学習環境を共に創る姿勢）の２点を中心に、生徒が「社会の中で自分らしく活躍し、自立的に行動できる人物」へと成長することを目標とした。

イ　目標達成に向けた取組の振り返り

（ア）取組概要

生徒の生活環境や価値観の多様化、ICT機器の普及、地域社会との協働の増加など、学校を取り巻く状況は大きく変化している。こうした中、生徒が自らの行動を振り返り、適切に判断できるような「学びとしての生活指導」が求められている。この背景を踏まえ、従来の「禁止の羅列」ではなく、生徒が自己指導能力を身につけるための行動規範へと再構築した。また、指導の透明性と納得感を高めるため、違反があった場合の指導段階（A～E）を明示した。

A：担任による指導

B：学年担当による指導（保護者連絡）

C：生徒指導主事による指導（保護者来校）など

（イ）成果

指導の基準を明確にすることで、本人・保護者・学校が共通認識を持ちやすくなった。また、喫煙・飲酒・情報モラル違反・窃盗・暴力など、重大な違反行為に対する対応を詳細に規定し、特別指導や停学の基準を整理することで、指導の一貫性と公平性が向上した。

（ウ）課題

職員室がない校舎の構造上、教職員間の情報や事例の共有に一定の時間がかかるため、基準に沿った指導体制が一部徹底できていない現状がある。

＜次年度への展望＞

今後は、多様な価値観をもつ生徒への柔軟な対応が求められることから、生活指導部を中心に継続的な検証・改善を行っていきたい。

今年度は自己指導能力育成基準の構築により、目的と手順を明確化した生活指導体制を整備する段階まで至った。これを基に全教職員で一貫した指導を展開していきたい。

＜参考資料＞　【自己指導能力育成基準】のイメージ

美鈴が丘高校　自己指導能力育成基準

生活指導部

1　学校生活最上位目標

・***セルフダイレクション***（何事も自分事として捉え、自分の頭で考え、自己決定して、責任ある行動を取る）
・***リスペクト***（他者と協働的に取り組み、違いや存在を認め合う中で安全・安心な風土づくりに寄与する）

以上２つの目標の育成が、社会の中で自分らしく活躍し、社会に受け入れられる自己実現をしていくことにつながります。

2　最上位目標達成に向けた自己指導能力を高めるための行動規範

区分	行動規範内容
学業	・授業での取り組みや課題に最大限注力する。 ・提出物の期限を守る。
家庭生活	・３点固定（就寝時間、起床時間、学習時間）し、健康管理に努める。
登下校・遅刻	・時刻を厳守する（登校は 8:25 まで、8:30 の HR 開始までに入室）。 ・遅刻したら遅刻届・入室願を必ず提出。早退は保健室の許可が必要。
通学（自転車通学は許可制）	・自他の命を守り、交通ルールを遵守する（ヘルメット着用を推奨）。 ・自転車は校内指定場所に施錠の上、駐輪する。 ・自動車・バイクの免許取得は禁止。
ロッカー使用	・必ず施錠して貴重品を管理する。 ・鍵紛失・破損は実費弁償。
頭髪	・染色・脱色・パーマ・エクステ・髪飾りは禁止。
服装・容儀	・制服を正しく着用（変形や着崩しをしない）。 ・防寒着は華美でなく大きなロゴのないものとする。 ・化粧・カラーコンタクト・装飾品・ピアスは禁止。
携帯電話・スマホ（警告御祥あり）	・持ち込みは許可制で校内では電源を切りロッカーで保管する。 ・使用は放課後 SHR 終了後、校外に出てから。
タブレット端末	・授業・学習活動・部活動連絡のみに使用 ・録音・撮影は許可制。充電は自宅で行う。

1 学校生活内での行動について、教員から指導・声かけがあればそれを受け入れて<u>その場で直す</u>。

2 その場で直せないものについては、「いつまでに改善するか」生徒の口から約束する（目安は１週間）。

3 指導を受け入れない場合は、以下の段階的指導基準に従い、本人との対話を重視しながら対応する。

3　段階的指導基準

指導段階	指導内容
A	担任による指導（口頭注意）
B	生活指導学年担当による指導（保護者連絡）
C	生徒指導主事による指導（保護者来校）
D	教頭による指導（保護者来校）
E	校長による指導（最終段階）

指導を受け入れない状態が続く場合は家庭反省指導を行うこともある。
家庭反省指導は保護者の協力を仰ぎ、家庭で対話する中で自己を見つめ、行動を改善することを目的とする。

２　連携機関等との意見交換・協議

⑴　コンソーシアム会議

第１回 コンソーシアム会議 報告

ア 日時
令和７年６月２０日（金）１８：００～１９：００

イ 会場
美鈴が丘高等学校　プレゼンテーションルーム

ウ 参加者
広島経済大学 胤森教授
広島市立大学 卜部教授
広島工業大学 溝上アドミッションセンター広報参事
広島ドラゴンフライズ 浦代表取締役社長
美鈴が丘公民館 河部館長
ウォンテッドリー(株) 貴船様、村岡様
広島市立美鈴が丘高等学校湯来町活性化プロジェクトメンバー　池田さん、藏場さん、桒田さん、田中さん、谷本さん、藤原さん、細田さん、山縣さん
広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、石井事務長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、池本教諭、青木教諭、楠香谷高校コーディネーター

計２３名

エ　内容

（ア）学校長挨拶

（イ）生徒発表「湯来町活性化プロジェクト」発表概要
- 湯来町の魅力紹介
- 活性化に向けた取組内容
- 湯来町ブレンドコーヒーの開発
- 活動の動機
  湯来町が好き
  行けば行くほど好きになる
  最初のきっかけをつくりたい
  メンバーのやりたいことを実現したい
- 今後の展望：同世代を中心に「みんなが行きたい観光地」にしたい

（主な意見・質疑）胤森委員
- 「行けば行くほど好きになる」「魔法」という表現が印象的。
- 活動の手応えについて質問。
- 後輩へも“魔法”が継承される仕組みづくりを期待。
- 小中学校とのローカルアワード開催を提案。（河部委員）
- 具体的に好きな点を質問。人の温かさ
  湯来温泉や自然

ゆったりとした雰囲気。（卜部委員）

・　魅力の言語化を徹底してほしい。

・　地元の人が気づいていない魅力の発掘を。

・　「世界一のミルクソフト」など強いキーワードでの発信を提案。

・　教育活動として、プロジェクトを通して何を学ばせたいかを明確にすべき。

・　生徒自身の「自分ごと」にならなければ探究は始まらない。（貴船委員）

・　「みんな」の対象は誰か。

→同世代を想定。

・　「知ってもらう段階」「行きたくなる段階」とフェーズ分けの検討を提案。（胤森委員（再発言））

・　「好きになる秘密」の可視化を。

・　美鈴が丘高校の生徒が魅力を実感すること自体が活性化につながる可能性。

・　小学校への聞き取りも提案。

（ウ）グローカル探究科の進捗状況（内門教諭）

・　グローカル探究科のコンセプト

・　育成の特徴

チーム担任制

未来会議（生徒と学校運営を議論）

探究活動時間は従来の普通科の約3倍

・　地域連携への協力依頼

（主な意見）浦委員

・　「グローカル人材」「活躍」が抽象的である。

・　ビジネスとの接続が弱い。

・　ゴールが不明確では曖昧に終わる懸念。

・　マーケティング専門家との連携を提案。

・　女子高校生を試合に集客する方法など、具体的課題設定を。

・　仮説設定→専門家連携→実践の流れを重視。

・　行動心理学などの学習も必要。

・　ブランディングとゴールの明確化が不可欠。（池本教諭）

・　文化祭企画を通じてビジネス感覚を育成したい。（村岡委員）

・　企業連携の具体像を明確にする必要。

どの場面で？どの分野の企業と？例：防災食開発なら食品会社との連携。

・　基本的なビジネスリテラシーを高めた上での連携が重要。（青木教諭）

・　どの企業に相談すべきか不明な場合の整理が必要。

抽象度を下げ、仮説を立ててから企業名を挙げるべき。

・　抽象度が高いほど質問が増え、交通整理が必要。（胤森委員）

・　湯来プロジェクトをモデルにして美鈴プロジェクト、沖縄プロジェクトなど展開を提案。
・　「未来の幸せなコミュニティを創る力」を育成目標に。（卜部委員）
・　教育活動として、学ばせたい内容を明確化する必要。
・　地域課題を生徒自身の課題へ転換する視点が重要。
・　教員側も「何を教えたいか」を深めるべき。
・　「解決に向けた一歩前進」を目指す大きな課題設定を。

（エ）まとめ（確認事項）
・　グローカル人材像およびゴールの明確化
・　プロジェクト設計の具体化（フェーズ分け・仮説設定）
・　ビジネス視点および専門家連携の導入
・　企業連携の具体的整理
・　生徒の「自分ごと化」を促す課題設定

第２回 コンソーシアム会議 報告

ア　日時
令和７年１１月１３日（木）１８：００～１９：００

イ　会場
美鈴が丘高等学校　プレゼンテーションルーム

ウ　参加者
広島経済大学 胤森教授
広島市立大学 卜部教授
広島工業大学 溝上アドミッションセンター広報参事
広島ドラゴンフライズ 浦代表取締役社長
美鈴が丘公民館 河部館長
ウォンテッドリー(株)　貴船様
広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、石井事務長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、池本教諭、青木教諭、楠香谷高校コーディネーター
計１４名

エ　内容

（ア）学校長挨拶

（イ）現在の進捗状況報告（１学年ＴＧＣ）
・　佐伯区いいね！プロジェクト
ポスターを区役所に批評依頼予定。返答を受けてブラッシュアップを行う。
・　保育力UPプロジェクト

フィールドワーク受け入れを実施。

・　地域活性化プロジェクトwithサンボレ
協力体制は整っているが、ゴール設定が不明確。
SNS発信を活用し、地域へ人を呼び込む取組へ方向付けを検討。

・　ドラフラタイアッププロジェクト
生徒の発案内容についてコメントをいただく予定。

・　イングリッシュキャンプ
中高連携事業の一環として実施予定。
日時：令和８年１月２４日（土）　会場：本校
広島市立大学からの助言を依頼。

（ウ）主な意見・協議内容

（胤森委員）

・　チャレンジングな取組が進んでいることに驚いている。教員が生徒の提案を丁寧に聞き、意見を求めている点を評価。
・　生徒同士の議論だけでは伸びが小さい段階があり、一定の時点で大人の批評が必要。
・　探究の力をつけるためには、探究を繰り返し行い、その力がついたことを確認することが重要。
・　効率性・公共性・幸福度を測るツールを生徒に示すべき。
・　「三方良し（企業・学校・生徒）」の視点を持つべき。
・　高校生が試行錯誤している姿を外部に見せることも意義がある。
・　指導の在り方として「認め、称え、少し揺さぶる」姿勢が重要。（内門教諭）
・　生徒同士のかけあいでは限界があり、ある時点から大人の批評を求めている。
・　最終アウトプットは教員が決定している。
・　プロジェクト間の差は積み重ねの差である。
・　生徒につけたい力は、課題解決策を提案する力、協働する力、多角的に分析する力、自分なりの最適解を出す力。

（卜部委員）

・　現時点では批評は控えたほうがよい。完成前に審査するのは適切でない。
・　「何を」「なぜ」を繰り返し、チーム内でコンセンサスを共有することが大切。
・　地域活性化の概念が曖昧であり、問いを設定する前に概念共有が必要。
・　探究は楽しいが、それだけでは不十分。生徒の頭の中にあるものを言語化させることが重要。
・　最適解を出すこと自体がゴールではない。解を出す過程で何がわかり、何がわからなかったかを知ることが探究。
・　できたことだけでなく、できなかったことや悔しさの体験を大切にする。
・　生徒の目線で「何を知らなかったか」を引き出すことが重要。

・　共感に偏らず、事実を淡々と示す姿勢も必要。最終的な称賛は卒業時でよい。

（溝上委員）

・　教員が自分の未経験分野を支援することの難しさを感じた。
・　地域をポスターで伝える意義は大きい。
・　教員は「教える」存在ではなく、多様な視点を持ち、生徒に伝える役割が重要。

（河部委員）

・　ポスターはスピード感に欠ける。SNS発信を重視すべき。
・　プロジェクト間の差が大きいことに教育的な不安がある。一定程度の共通基盤が必要。

（貴船委員）

・　出口（アウトプット）の決定主体は誰か。
・　アウトプットが本質的な解決になっているか検討が必要。生徒の柔軟な発想を切り捨てないこと。
・　大人が制約を先に取り払うのではなく、生徒が乗り越える経験を重視すべき。
・　すべての生徒が等しく必要な力を身につけて２年生に進級できるようにしてほしい。
・　気持ちが向いていない生徒への対応として、教員が方向性を示し、動き出したら任せる。
・　地域貢献を前面に出しすぎると難しい場合がある。生徒の興味（例：車）から出発し、モビリティの観点へ広げる方法もある。
・　これまでの未来計画により、基礎の基礎は全員が習得している。（浦委員）
・　ビジネスマンになることを一つのゴールに据えるなら、効率性・合理性の視点が必要。
・　ゴールが抽象的すぎる。具体化が必要。
・　ビジネスの基本や金融リテラシーを学んだうえで取り組むべき。
・　仕事とは「提案」である。対価以上の価値を返せるかを考える視点が重要。
・　クラウドファンディングは有効だが、持続可能な仕組み設計が必要。
・　高校生はムーブメントを起こせる世代。大人はそれを支援する立場にある。

（エ）まとめ

各プロジェクトは進行しているが、以下の内容が今後の重要課題として確認された。

・　ゴールの明確化
・　概念の共有

・　ビジネス的視点の導入
・　「何がわかり、何がわからなかったか」を重視する探究の徹底
・　次回会議に向け、各プロジェクトの目的・評価観点をより具体化する。

第３回 コンソーシアム会議 報告

ア　日時

令和８年２月４日（水）１８：００～１９：００

イ　会場

美鈴が丘高等学校　プレゼンテーションルーム

ウ　参加者

広島経済大学 胤森教授
広島市立大学 卜部教授
広島工業大学 溝上アドミッションセンター広報参事
広島ドラゴンフライズ 浦代表取締役社長
美鈴が丘公民館 河部館長
ウォンテッドリー(株) 貴船様
広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、石井事務長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、池本教諭、青木教諭、楠香谷高校コーディネーター

計１４名

エ　内容

（ア）学校長挨拶

（イ）現在の進捗状況

a　フランス・バルトルディ高校とのオンライン交流

b　１学年のTGCの取り組み

①　佐伯区いいねプロジェクト
・　ポスターを区役所に批評していただき、２回目のブラッシュアップにつながった。
・　ポスターを活用したカレンダーを制作中。
・　将来的にはクラウドファンディングにより予算獲得できるクオリティを目指す。

②　レスキューマインドプロジェクト
・　防災館フィールドワーク実施。
・　防災訓練の提案準備中。

③　地域活性化プロジェクトwithサンボレ
・　佐伯区活性化の企画書を作成中。

・　企画書および動画を制作し、提案予定。
（例）試乗会＋観光地巡り、コイン通りラーメン店スタンプラリー。

④　保育プロジェクト
・　フィールドワーク３回実施。
食育：園児の好き嫌いをなくす紙芝居制作。広報：園児募集動画制作。
保育充実：おもちゃづくり。
・　課題は予算確保。

⑤　ドラフラタイアッププロジェクト
・　試合観戦後、生徒が企画書を作成。

⑥　グローカルイングリッシュキャンプ
・　チラシ配布後の応募は３～４名。
・　課題の洗い出しが必要。
・　探究の時間内のみでの実施は難しい。
・　留学生来校型プロジェクトへの転換案も検討。

c　全体的課題
・　ニーズ把握と専門家の指導が必要。
・　成果を出すには継続実施が重要。次年度への継承が課題。

（ウ）主な意見・協議内容
a　継続性・カリキュラム
（胤森委員）
・　探究の時間だけでは難しいという点について、今後のカリキュラムマネジメントに期待。
・　単年度で終わる課題であっても、取り組んだ生徒の経験や課題認識を価値とし、次年度へつなぐべき。
（内門教諭）
・　１年生の探究を礎とし、２年生の個人・グループ探究へ接続する構想である。

b　成果の捉え方
（卜部委員）
・　何に困っているのかが見えにくい。何をもって成果とするのかを明確にすべき。
・　結果について、なぜうまくいったのか／いかなかったのかを具体化することが重要。
・　現状は素晴らしいが、今後どう発展させたいのかを明確に。
・　「箱」は教員が用意し、「魂」は生徒にもたせるべき。
・　浦委員のような発想ができる高校生をどう育成するかが課題。講演等の機会も有効。

c　ビジネス・資金調達の視点

（浦委員）

・　持続可能なビジネス化の視点が必要。

・　地域住民から余っているポイント（例：dポイント等）の寄付を募る仕組みはどうか。

・　寄付者に文化祭等で特典を付与することで企業連携にもつながる可能性。

・　お金を集める発想を転換する。

・　クラウドファンディングが可能なら、ポイント寄付も可能ではないか。

・　お金を集めることは悪ではない。お金が集まること自体が評価である。

（胤森委員）

・　カレンダーは生徒が手渡しで届けるなど、顔の見える活動が大切。

・　幼稚園ガイダンスに生徒が登場するなど、主体的に関わる形が望ましい。

・　資金を集め、配分するプロジェクトがあってもよい。

d　教員の変容・組織体制

（溝上委員）

・　教員の変容はどうか。成果と課題をどう捉えているか。

（内門教諭）

・　ノウハウの蓄積と継承が重要。生徒だけでなく教員にも継承が必要。

・　学年の全教員がプロジェクト担当。学年職員室で常に情報共有している。

e　地域との関係・発信

（河部委員）

・　地域住民がグローカル探究科の存在を十分に知らない。

・　努力を積極的に発信し、地域に認めてもらう取組が必要。

（吉村委員）

・　持続性を意識し、高校生・教員双方の努力が継続する仕組みを。

・　成長は間違いない。佐伯区のための取組に感謝。

・　発信の範囲を絞ることも重要。

・　持続可能なヒト・モノ・カネを地域とともに創ることをコンセプトにしてはどうか。

f　三者指導体制・予算

（貴船委員）

・　三者指導体制の各フェーズで目星はあるか。

・　phase1（ニーズ把握）とphase3（評価）はコンソーシアムで対応可能だが、phase2（実行）には資金が必要。

・　文科省予算は申請か配分か。

（内門教諭）

・　予算配分の方向性を議論し、市教委事業へ反映させたい。

・　ニーズ把握はコンソーシアム会議。

・　技術面は地域や出入り業者。
・　デザイン面は美術教員が支援。

（エ）まとめ

各プロジェクトは着実に進展しているが、以下の内容が今後の重点課題として共有された。

・　成果の定義と振り返りの明確化
・　継続性と継承の仕組みづくり

⑵　運営指導委員会

令和７年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」指定校

美鈴が丘高等学校 第１回 運営指導委員会 報告

ア　日　時
令和７年８月８日（金）１４：００～１６：３０

イ　会　場
美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ　参加者
広島市教育委員会学校教育部　星野指導担当部長（座長）
広島県公立大学法人叡啓大学　川瀬教授
広島県公立大学法人県立広島大学　向居教授
広島経済大学　胤森教授（ご欠席）
岡山県青少年教育センター閑谷学校　香山所長
広島市立大学　元美鈴が丘高等学校長　柳先生
広島市教育委員会学校教育部指導第二課　舩越課長補佐、福山指導主事、重指導主事
広島市立美鈴が丘高等学校　合田校長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、
池本教諭、三浦教諭、楠香谷コーディネーター　計１５名

エ　内　容

＜委員等挨拶＞

香山委員：持続可能な取組の一環として、コンソーシアムと学校運営協議会（コミュニティスクール）の融合について検討をお願いしたい。

合田校長：いかに学校を開くかをいつも考えている。現状、たくさんの企業に来てもらっている中で生徒が変わる様子をたくさん見てきた。眩しい大人の姿を見せることが大切だと思う。

池本教諭：１学年主任としては、生徒が自分の好きを見つけるむずかしさを痛感している。また、探究を進める中で自分の好きが変わっていく流動性もある。一番の課題は、自分の好きがどれかわからないことである。色々なケースがあるが、第１学年はこの時期が重要だと思っている。

＜探究の深化について＞

香山委員：科学部の取組の中で、福井県立大の大学院生から助言は、プロボノメンターそのものである。牡蠣殻による水質改善の取組は素晴らしい。商売に結びつくかもしれない。高校生の探究だから儲けなくてもいいというのではなく、社会人と組んで儲けることからも学べるのではないか。

厳しいことを言うようだが、プロボノメンター活用の仕組みを全ての生徒に年度内に作って欲しい。この仕組みが機能すれば間違いなく爆発的に探究の質が向上するはずである。メンターとの接続はコーディネーター１人に任せるのではなく、スタートアップ時はみんなで試行錯誤しながらやっていくしかない。１つやってみて、違うかな、別の探究ではどうかな、とトライアンドエラーを繰り返し、ロールモデルを作り上げて欲しい。社会人なり院生なり協力いただければ探究の質が上がっていく実感が出てくる。何とか今年度中にお願いしたい。

外部のメンターが校内に入っていくことについて安全面が心配とのことであったが、ガイドラインを作ってはどうか。また、１対１になる場合が懸念されるが、そのあたりはチームで探究の壁打ちを受けるシステムにしてはどうか。Ａさんへのアドバ

イスがＢさんにも役立つことはよくある。１対多の壁打ちもできるのではないかと思う。特にオンラインでの指導ではいけるのではないか。プロボノメンターの依頼について大学もいやとは言わないだろう。早く手をつけるといいと思う。

池本教諭：探究で生徒が外部に出る場合、事前指導をしないと企業に行けないという教員が多い。これにより生徒が社会と接続できない状態があることがディレンマである。生徒が個人ではなくグループでインタビューに行かせることで、事前指導が必要な生徒も変われるのではないかと考えている。

探究の壁打ちは１on１はなかなか難しいので、香山委員の言われるように１対多がいいのではないかと感じる。

香山委員：企業の中間管理職以上は権限を持っている。是非プロボノメンターの依頼にチャレンジしてみて欲しい。事前指導ができた生徒でないと外部に出してはいけない、というのはあくまで学校側の意見である。企業からするとそういう子ほど面白いと捉えられる場合もある。活動自体が好きな生徒もいると思うので、体験が含まれている学び方がヒットする生徒もいるかもしれない。

柳委員：探究のプロジェクトごとにグループで自由に参加させてもいいのではないか。友達のそういう姿を横で見ながら成長する生徒は多い。探究に前向きになれない生徒のハードルは低くなる。先輩の探究についていってもいい。同年代の意欲的な行動を見ることで成長を促すことができる。意欲がある生徒にとっても成長できる。

向居委員：先日美鈴が丘高校に派遣した探究メンターの大学院生から話を聞いたが、もう少し個人的な繋がりが欲しかったとのことであった。探究の支援をしている広島皆実高校の探究は今年からガラッと変わり、昨年の希望者のみの壁打ちから今年は全体に講義をしてからの開始となった。このやり方はいまいちだと感じており、やはり専門家として個別の対応の方が良いと感じる。美鈴が丘高校の事例でも、大学院生の専門性がうまく機能しなかったのだろう。

そういう意味では、高校の先生の探究指導のレベルアップが必須となる。校内で探究指導のアイデアを広げていき、全ての先生方がそれをできるようになればいいと思うがそこが一番難しい。教科の延長でもいいので、先生方の得意な専門を活かしながら、その先に我々のような専門的な所に繋げるシステムが良いのではないか。

川瀬委員：チーム探究か個人探究かという話題があったが、叡啓大学ではチーム探究から段階的に個人探究に移行していくプログラムを採用している。探究を支援している広島皆実高校や加計高校芸北分校どちらもチーム探究から入っている。探究の指導については叡啓大学でも同じ悩みを抱えている。自分の興味を掘り下げるだけでは高度化していかない。図書館をどう使うかや、フィールドワークなどの調査法について専門的なスキルを身に付ける必要がある。この探究基礎力は一度説明しただけで身に付くものではないため、継続して指導していかなければいけない。発表はうまいけど、中身が伴っていない学生がいるのはまさにこのことである。

＜探究の評価について＞

川瀬委員：評価のところが気になっているが、国際平和文化都市広島に資する人材とすると資質能力が縛られてしまうのではないかと感じる。そこのところはどうなっているのか。

向居委員：発表がうまいだけで内容が伴わない学生は確かにいる。文章をしっかり書かせた上で、それをまとめさせ発表とするのが良い。重要なのは論理的が担保されているかだ。最初は３００文字とかでいいので、自分の探究をいきなりスライドにまとめさせるのではなく、文章で書かせるよう取り組んではどうか。

池本教諭：その通りだと思う。そのような探究に向けて、先生方が主体的に歩んでいけるのが理想だが、実際には先生方が教育研究部から発出される指導案を待っている状況となっている。

内門教諭：第１学年の現状としては、単元が移り変わる段階なのでなかなか先生方も落ち

つかない状況である。個人探究に入っていくと円滑に進んでいくのではないかと感じている。

香山委員：「Inspire High」の年間費用はどれくらいなのか。（５，０００円程度との回答を受けて）それは安いと感じる。一度導入した上で継続して使用するかどうか評価・検討していけばいいのではないか。また、現在評価ツールとして使用している「Ai-GROW」は他者評価なので相対的に評価が下がる可能性がある。

生徒がこれから長い人生を歩んでいく上で自己評価は非常に大切となる。ルーブリックで探究の途中段階でも自己評価できるよう整理するのが良いのではないか。探究の評価の具体としては、何を根拠にそうなのかと問いかけながら最終的に「要旨」をつくる力を測る。ポスター１枚作らせる。そのための文章を説明として書かせ評価する。そういった評価の仕組みをつくるといいのではないか。廊下にも評価物であるポスターが掲示してあるといい。下級生もそれを見て参考にすることができる。

個人探究の前にチームで評価し合うプロセスが大切だ。何をもって評価するのかを明確にした上で、進路系統別にグループを作って、グループで定期的にラーニングレビューミーティングを入れていく。その際にルーブリックを用いていく。お互いに批評ができる機会を作っていくと良い。その際、メンターのような外部からの指導を受けると良いのではないか。このやり方であれば、安全面も担保できるだろう。

会議冒頭でも話をしたが、コンソーシアム会議を学校運営協議会（コミュニティスクール）として構築すれば、委員に出す報酬の１／３は国庫補助とすることができる。持続可能な取組につながると思うので是非検討して欲しい。

また、楠香谷コーディネーターが企画した生徒希望者講演会だが、是非、探究心が目覚めた生徒にささる講演会にして欲しい。この講演者からプロボノメンターを開拓していって欲しい。

川瀬委員：コンソーシアム会議は学校の社会への窓口だと思うが、地域社会との接点が見えにくい。地域とか共生とかの要素を設定メンバーにも反映させると良いのではないか。また、「地域」とは何かの定義を忘れがちになるため、何度も確認するほうが良いと思う。

評価のところで、ルーブリックはいいのだが、生徒と教員の共通言語をつくるイメージで取り組まれるといいと感じる。２、３年での成長を評価する。また、それだけだと不安定なので成果物もハイブリッドでつくらせるといい。ルーブリックは成果物を評価するツールとすると良いだろう。

大学では成果物と報告会、レポート（個人）を使って評価している。グループであまり取り組まない生徒としっかり取り組んだ生徒の差が生まれる状況である。

香山委員：修学旅行の使い方も考えておいて欲しい。例えば、調査力を育成する修学旅行という位置付けにしてもいい。コンピテンシーを明確につける修学旅行として打ち出すとよい。

＜その他＞

内門教諭：プロボノメンターを学校に安全に導入するにはどうしたらいいか。事例があれば紹介して欲しい。

香山委員：他県の進学校の事例で言うと、自校の卒業生や大学の院生か研究者、会社の研究室を中心に集めていると聞いている。また、北海道の高校の事例で言うと、手分けして人海戦術で探しているとのことである。とがっている人材を探すのは苦労するがみんなで探さないといけない。だが、一旦探すと継続して支援していただけるようである。

川瀬委員：叡啓大学のキャリアメンターの事例で言うと、インターネットで探しても割といると感じている。面接をした上で関わってもらうことにしている。

香山委員：ベネッセが外部人材の活用を商品化しようとしている。ベネッセは進研ゼミで大学に入った社会人の人材を持っている。登録者は２～３００人であると聞いてい

る。

令和７年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」指定校
美鈴が丘高等学校 第２回 運営指導委員会 報告

ア　日　時
　令和７年１２月１日（金）１４：３０～１７：００

イ　会　場
　美鈴が丘高等学校 プレゼンテーションルーム

ウ　参加者
　広島市教育委員会学校教育部　星野指導担当部長（座長）
　広島県公立大学法人叡啓大学　川瀬教授（ご欠席）
　広島県公立大学法人県立広島大学　 向居教授
　広島経済大学　胤森教授
　岡山県青少年教育センター閑谷学校　香山所長
　広島市立大学　元美鈴が丘高等学校長　柳先生
　広島市教育委員会学校教育部指導第二課　舩越課長補佐、福山指導主事、
　富成指導主事、吉村キャリア教育コーディネーター
　広島市立美鈴が丘高等学校 合田校長、佐々木教頭、沖本主幹教諭、内門教諭、
　池本教諭、三浦教諭、楠香谷コーディネーター　　計１６名

エ　内　容

＜探究の深化について＞
香山委員：探究最終発表会を、象徴性のある会場（例：広島国際会議場）での大規模ショーケースへと拡張し、午前は発表、午後は中学生・保護者への広報を併設する複合イベントへ転換してはどうか。代表制ではなく全員参加型の『エキシビジョン・ナイト』方式を取り入れてはどうか。
胤森委員：発表会を双方向型に設計し、ピア・フィードバックやオンラインフォームを活用して全生徒の関与を担保してはどうか。あわせて、多様な外部連携先が集う大規模 Q&A（ブリッジ）的なイベントを設け、探究の着火点を増やしてはどうか。
向居委員：探究活動で起こりがちな『手段の目的化』を防ぐため、まず活動の目的を明確化し、コンテスト参加やインタビューは目的達成の手段として位置づけ直してはどうか。安易に外部に聞きに行く前に文献・データの徹底調査を指導してはどうか。

＜探究の支援体制・教員の指導力向上について＞
向居委員：校内で探究指導のマニュアル化・標準化を進め、教員の得意分野を基点に支援し、必要に応じて専門家に橋渡しする二段構えの体制とすることを提案してはどうか。
胤森委員：チーム担任制のPDCAのうちC（検証）を強化し、利点と運用上の課題を具体

的指標と事例で検証する運用に改めてはどうか。

柳委員：チーム担任制を教員育成システムとして位置づけ、若手とベテランの協働を通じて『一人担任＝一人前』という旧来文化を転換する方針を明示し、継続運用の体制を固めてはどうか。

＜評価の在り方について＞

胤森委員：アンケートの増減に一喜一憂せず、『なぜそうなったか』を掘り下げる質的分析（自由記述・事例抽出・面接法など）を導入してはどうか。特に『協働』『学校推奨意向』など低下項目の要因分析を定例化してはどうか。

向居委員：スコア低下をプログラム要因に単純帰属せず、入学者層の変化や入学時点の自己肯定感など外的要因も併せて検証する多角的評価設計に改めてはどうか。

＜生徒の主体性・自律性の育成について＞

香山委員：テーマ習得者を『スモールティーチャー』として認定し、生徒リーダーがグループ運営・進捗管理・相互支援を担う仕組みを導入してはどうか。大学生・大学院生のメンターを積極活用してはどうか。

柳委員：生徒が『自分の意見は重要で、行動すれば変化を起こせる』と実感できる学校文化を目標に掲げ、日常の意思決定や学級運営で生徒の影響力を可視化する仕掛けを増やしてはどうか。

＜外部連携・地域との関わりについて＞

香山委員：『広島らしさ』を表層の属性に限定せず、地域との結節点を掘り起こす問いを設定してはどうか。大学生・大学院生の学校運営協議会登用など、外部人材の関与形を広げてはどうか。

胤森委員：企業・大学・団体が一堂に会する横断的な対話機会を設け、生徒が主体的に質問・相談できる『ブリッジ的』なイベントを設定してはどうか。

向居委員：グローバルの視点は海外渡航に限られないため、身近な地域課題の中に普遍性を見出すという考え方をカリキュラムに組み込んではどうか。

＜その他＞

香山委員：探究最終発表会を学校広報（入試説明会）と接続する複合イベントとして設計し、教育効果と広報効果の同時最大化を図ってはどうか。

柳委員：過去の平和教育アンケートの反省を踏まえ、多数決依存の意思決定文化を見直し、少数意見の反映メカニズム（熟議→合意形成）を校内標準にしてはどうか。

胤森委員：自己効力感の向上を、探究だけに委ねず、全教科でのアウトプット機会の増設（書く・話す・発表する）を評価設計に組み込んではどうか。

向居委員：探究以前の研究作法（文献レビューの徹底、先行研究の批判的読解）を共通必修スキルとして明示し、入門期から反復指導してはどうか。

◆広島市立美鈴が丘高校　公式インスタグラム

日常の風景や行事、探究について発信しています！

@MISUZUGAOKA_HIGHSCHOOL

広島市立美鈴が丘高等学校グローカル探究科
広島県広島市佐伯区美鈴が丘緑二丁目１３−１
082-927-2249